

〈資料〉

[古武道研究班]

古武道研究（第4報）

中国武術の琉球伝来と唐手術の発祥に 関する研究課題

小林 勝法 宮本 知次
青木 清隆

要 約

これまでの先行研究によれば、中国武術が琉球に伝来した経路として次の3経路、すなわち、①福建省からの移民伝授説、②冊封使の随行武官伝授説、③中国に渡航した琉球人伝授説、が推察されている。しかし、伝えた人物や型などの具体的なことについては、明治時代以降は明らかになっているものの、それ以前においては解明されていない。つまり、どの経路についても現在のところ仮説の域を出ていない。その理由として、以下に示す3つ、すなわち、①禁武政策によって武道関係の史料が少ないこと、②型の名称が意味不明のものが多いこと、③型の名称が訛伝されていること、があげられる。

そこで、文献や口承だけに頼らない別の方法でこの問題にアプローチすることを提案した。それは、唐手の型と中国武術の套路を名称と運動技術そのものに着目し、比較考察するという2つのアプローチによってである。これらの2つのアプローチで研究を進めるためには、まず唐手と中国武術の技術や歴史に精通していることが必要になる。そして、さらには、中国の各地の方言（特に福建省）に詳しいことが要求される。これらの両国での調査と資料の収集・分析の作業は、言語の問題もあって、一国の研究者だけでは容易ではないので、日中の研究者による共同研究が期待されることを指摘した。

1. 問題の所在と研究目的

日本空手道は、その発祥地の琉球¹⁾では元来「唐手」（トウデー、後に日本本土でカラテ）と呼ばれていたことからわかるように、そもそも中国武術が琉球に伝来して発展し、その後日本本土で近代化して成立した武道である。日本本土に初めて紹介されたのは、大正5年（1917年）に松濤館流の創始者である富名腰（ふなこし）船越（ふねこし）義珍（ぎちん）（1868～1957年）が京都武徳殿で琉球唐手術と称して演武したときとされている²⁾。また、大正11年（1922年）に開催された第1回体育博覧会（東京、文部省主催）では「カンクウ」という型を演武している³⁾。

このようにして日本本土で紹介された唐手術は、はじめの頃は琉球拳法やカラテとも呼称され、悪役があやつる武術として小説などでは描かれていくことになる。しかし、富名腰が嘉納治五郎の招きにより講道館で唐手を指導したり、剛柔流創始者の宮城長順、糸東流創始者の摩文仁賢などの師範も指導するなどして日本本土でも普及した。大正13年（1924年）には慶應義塾大学に唐手研究会が発足すると、東京帝国大学や早稲田大学、拓殖大学、東京商科大学、日本医科大学等々に次々と唐手研究会が設立されていく⁴⁾。そして、慶應義塾唐手研究会が昭和4年（1929年）に「空手」という呼称を使用するようになり、「空手」の呼称が一般化していくのである。

日本本土での普及とともに、唐手は近代化および日本化していく。高岡英夫⁵⁾によれば、競技方法や姿勢、動作、足捌き、間合い、防具、衣装などは、剣道と柔道からの影響がうかがえるし、フットワークや回し蹴り、膝蹴りなどの技術はボクシングやムエ・タイから取り入れたものと推察できるとしている。この近代化には上記の大学の唐手研究会が大きな役割を担った⁶⁾。沖縄では現在の中国武術のように単独で型の稽古を繰り返していただけたが、論理的に考え体系化しようとする大学生らによって、技術の体系化が進められた。まず、唐手で使用する身体各部や構え、打撃の型に名称をつけたりして、唐手の技術を体系化している。稽古方法においても沖縄では行われていなかった定位置での反復練習、すなわち「その場基本」をはじめ、現在行われている各種の稽古方法が考案されていった。これらのような技術と稽古方法の理論化や体系化においては、唐手を始める以前に他の武道を修練していた者たちの進言があったらうということは容易に想像できる。

蛇足ながら、日本化した空手道に対し、沖縄では古くから伝わる唐手や武器術を古武道と称して今でもなお稽古している。それらは、棒術やサイ術、ヌンチャク術、二丁鎌術、ティンバー術、鉄甲術、スルチン術、トンファー術等々である。1994年時点で、沖縄古武道連盟や琉球古武道保存振興会など15の団体が活動している⁷⁾。

近代化・日本化して成立した空手道であるが、そもそもそのルーツは中国武術である。それにもかかわらず、戦前には沖縄の指導者自らが中国武術との強い関係を否定するような言説を行っている。糸東流を起こした摩文仁賢和は、中曾根源和との共著『攻防拳法・空手道入門』（1938年）において、「空手拳法は最初『琉球拳法唐手』と紹介せられたがために、『琉球』に對する認識不足と、『唐』の字から受ける感じとで、恰も異人種の武術であるかのごとき誤解をもつ人が今日でも多少あるようである」と述べ、「琉球拳法は決して支那拳法そのものではありません」と断じている⁸⁾。しかし、具体的にどのように相違するのかについては論じておらず、もっぱら精神論を展開しているに過ぎない。日中戦争下にあつてはこのような言説もや

むを得なかったのだろう。

また、富名腰は自身の名前を日本風に船越と改めているし、昭和10年（1935年）に刊行した『空手道教範』では、型の名称も日本風に改称している。船越は、「従来の口碑のままにピンアン、セーション、ナイハンチ、ワンシュー、チントウなどと称していたが、中にはその意味の不明なものもあり、教授上も紛れ易く、且、立派に我が国の空手になりきっているものに強いて中国風の不可解な名称を襲用したくないので、不相当と思われるものは或は古老の形容を参酌し、或は著者の卑見を以て改称することにしたのである」と述べている。そして、「ピンアン」を平安に、「ワンシュー」を燕飛に、「チントウ」を岩鶴にするなどの改称を行っている⁹⁾。

したがって、今なお空手道が琉球古来の武術であるがのごとき誤解が絶えない。誤解が完全に払拭できないのは、中国武術の琉球伝来について不明のことが多いからである。そこで、本研究は、唐手の発祥と発展に中国武術がどのように関与したのかについて、これまでの先行研究から解明されている点を整理し、残されている問題点を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の対象とする時期と方法

唐手の発祥・発展と中国武術の関係については、これまでに郷土史研究者や空手道研究者によって精力的に調べられてきており、その成果のいくつかは刊行されている。近年、特にここ2～3年の間に、すぐれた専門書が発行されている。

それらを見ると、明治時代以降については史料があり、伝承が比較的確かなこともあって解明が進んでいることがわかる。例えば、宮城長順や摩文仁賢などを育てた東恩納寛量（1853～1915年）は、青年期の15年間、福建省の福州に滞在して中国拳法を学び、それを沖縄に伝え、明治22年（1889年）に沖縄県下初となる唐手道場を設立している¹⁰⁾。また、上地完文（1877～1948年）も福建省で13年間修練した末に沖縄に帰り上地流を開いている¹¹⁾。このように、明治時代以降であれば、誰がどこで何を修得し沖縄に伝えたかが解明されている。

しかし、明治時代以前については不明の部分が多い。岩井虎伯¹²⁾は、その理由を2つあげている。1つは、琉球への文字の伝来が13世紀末頃と遅く、文字として記録に残っている史料が少ないことであり、もうひとつは、史書の編纂が始まったのが17世紀から18世紀にかけてと遅いことである。したがって、唐手に関する史料が極めて限られているので、詳らかにできないのである。

ところで、中国武術との関連を探る上で重要な時代は、12世紀後半から18世紀である。なぜなら、中国武術は、明代（1368～1644年）から清代（1644～1912年）にかけて大きく発展し、

技術は巧妙になって多種多様となり、多くの流派が発生した¹³⁾からである。特に、明は軍人養成学校である武学を洪武年間（1368～1398年）に再建しているし、1387年には科挙制度の中に武科を設け、民間から武術に長けた者を採用した¹⁴⁾。清時代になると民間には武術団体が多く作られ、これにより多数の流派が生じている¹⁵⁾。

そして、この時期に中国と琉球の交流が盛んになるのである。1372年に中山王の察度が明国へ入貢しているし、1404年からは、琉球は明国、そして後には清国の冊封体制に組み込まれ、中国とその周辺諸国との貿易によって大交易時代を築き上げるのである。

そこで、本研究ではこの時期に焦点を当てて検討を進める。本研究で使用する図書や雑誌記事などの文献資料の多くは、郷土史研究者や空手道研究者によるものである。彼らは、多くの労力を割いて研究を進めているものの、ディレクターの研究者であるので、公刊された文献の多くは実証主義的研究のスタイルを取っていない。中には、事実と推論を混同して論を組み立てているものも見られる。そのため、実証主義の立場から検証する必要がある。

3. 先行研究にみる中国武術の琉球伝来経路説

これまでの先行研究によれば、中国武術が琉球に伝来した経路として諸説があげられているが、概ね以下の3経路にまとめることができる。それぞれの経路について示されている根拠を整理し、その問題点を述べる。

(1) 福建省からの移民伝授説

福建省から多数の中国人が那覇の久米村に移住して居留区を形成していた。この移植民によって、造船や船舶修理、航海術、通訳、外交文書作成、商取引方法、海外情報などの多くの技術や文化が琉球にもたらされた。第一尚氏王朝の国相となった王茂や懐機などの大政治家や学者もいたという¹⁶⁾。この移植民の中に中国武術の達人がおり、その武術の達人から琉球人が習ったという説である。日本の明治維新前後の歴史書に登場する空手家たちの多くは、久米村出身者かその関係者であった¹⁷⁾ことがその根拠とされている。また、「琉球の唐手術は、中山王の時代に渡来した福建人36姓の人たちが浮島（現・那覇市）に持ち込んできたもので、明治維新前までは久米村に住む人たちの特技だった」という口承があるという¹⁸⁾。

しかし、14～17世紀に唐手の存在をうかがわせる史料はこれまでのところ見つかっていない。現時点で最も古い史料とされているものは、『大島筆記』である。これは、1762年に薩摩行きの琉球船が土佐の大島浦に漂着した折りに、土佐藩の儒学者戸部良熙が琉球事情について聞き

取りしたものである。この記録によると、『武備志』¹⁹⁾に記載されている拳法と思われる武術に秀でた公相君なる人物が弟子を多数引き連れて来琉し、手技足技を巧妙に使い、大力の者を容易に倒したとのことである²⁰⁾。そして、現在の空手道に伝わる「ケーシャンクー」（漢字で表すと公相君）はこの公相君が伝えた型であるとされている。ただし、これには後で示すように異論がある。

確かに久米村に唐手が伝承されていただろうが、それが14世紀の福建省移民からのものかどうかは不明である。14世紀以降も継続して移民があった、あるいは、久米村の者が中国人との交流の中で中国武術を修得したと考える方が自然であろう。

(2) 冊封使の随行武官伝授説

冊封使の随行武官が中国武術の手ほどきをしたという説である。琉球は1404年から、明国、そして後には清国の冊封体制に組み込まれていた。冊封使とは、進貢国の王侯が交代するに際し、中国皇帝が新王を認証するために進貢国に派遣した使節である。この関係は1866年まで続き、全部で24回の冊封使が琉球に遣わされている。一行は200人から300人に達したという。清朝時代には、和寇に備えるために多数の武官が随行している。その武官たちは琉球滞在中も武術を練習していたので、その武官から習ったという説である。冊封使の滞在は通常約3カ月で、長い場合は10カ月くらい逗留した例もあったので、琉球人が武官から武術を習う機会は十分にあったと推察されている²¹⁾。

(3) 中国に渡航した琉球人伝授説

中国に渡航した琉球王朝の役人や留学生、商人が持ち帰ったという説である。それぞれについて検討しよう。

a 進貢使

進貢とは冊封体制下にある国が中国の皇帝に貢物を献上することをいう。当時、那覇から中国に渡るのには、まず、船で福建省の福州に渡っていた（図参照）。1470年頃までは、福州の少し南の泉州であった。泉州や福州は当時、世界でも屈指の貿易港で、南宋のとき、泉州はすでに70余りの国や地域と貿易関係をもっていたという²²⁾。

進貢使一行は福州に到着すると、柔遠駅に逗留する。柔遠駅とは外国からの進貢使一行が宿泊する場所である。はじめは来遠駅と称し泉州の車橋村地方に1405年に建設されたが、1469年に福州に移転したときに、呼称も柔遠駅に改められた。琉球からの進貢使一行もここに長期滞在した。この柔遠駅は、後には、琉球館と称し、琉球人が独占使用するようになる。さらに

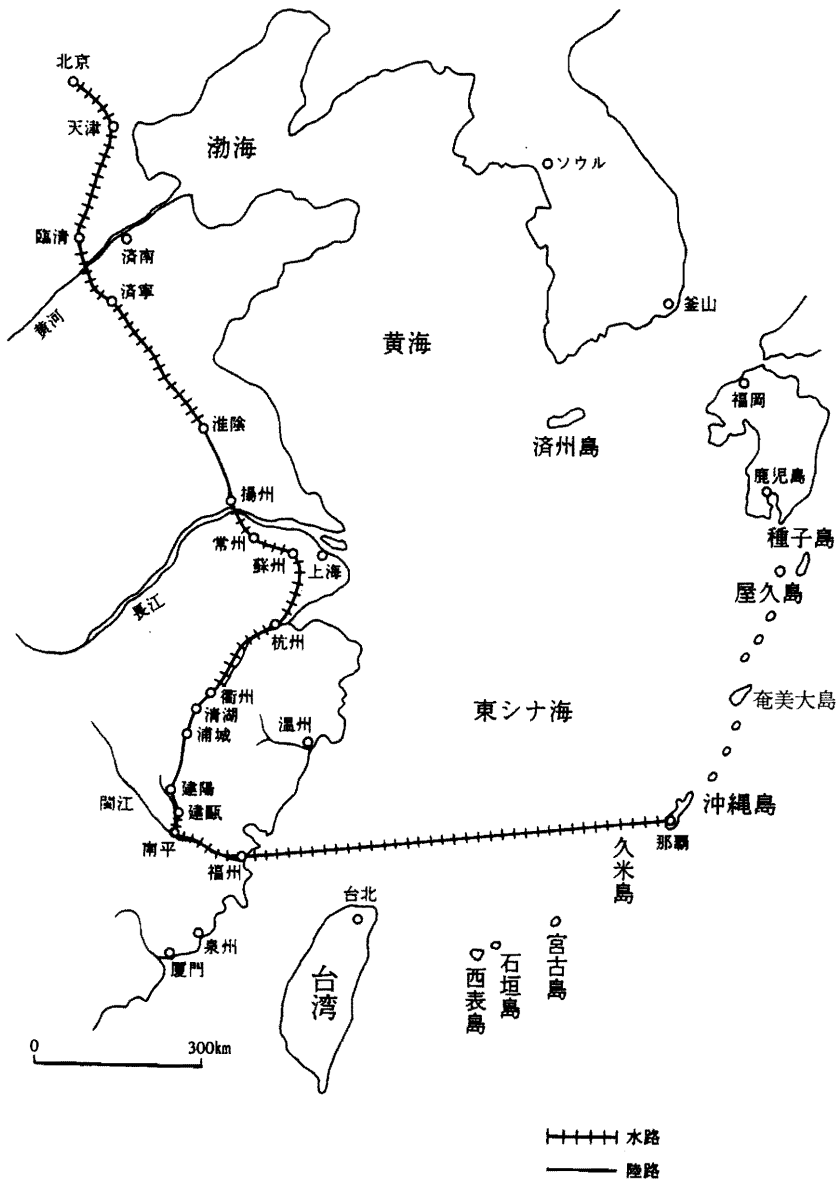


図 那覇～北京の経路

出典：大西栄三『空手史』龍書房，1999年

廃藩置県以後，すなわち琉球処分以後は，琉球会館と呼ばれ，福州在留の琉球人のクラブのようになったという²³⁾。

そして，正副使以下の官員はさらに国都の南京へ，1421年に北京に国都が移ってからは北京

へまで赴くのである。中国へ赴く進貢使一行ははじめは100人ほどであったが、1522年には150人に増やされた。そのうち北京にまで赴くものは20人余りで、その他は、福州の柔遠駅に留まった²⁴⁾。

福州から北京までは図に示しているとおり、水路と陸路を伝って北京まで上っていた。その行程にはおよそ40日余りを費やしたという²⁴⁾。正副使以下の一行が北京に行って戻ってくるまでの間、数カ月間も、残りの百数十人は柔遠駅に滞在していたことになる。その間に武術を習う機会は十分にあったと推察される。

b 留学生

琉球は、1392年から、中国の最高学府である^{こくし監}国子監に留学生を送っている。国子監は、明・清時代には南京や北京などの都に置かれた。中国政府支出の留学生は明・清時代を通じて約400人が国子監で学んだというし、福州で勉強する私費留学生は明・清時代に1,000人以上にのぼり、柔遠駅で生活していたといわれている²⁵⁾。この留学生たちも武術を習う機会は十分にあったと推察される。

しかし、留学生が武術を学んだかについては今のところわかっていない。「国子監留学生については、明史関係資料でも、沖縄史でも、誰々が留学し、誰々が帰国し、誰々が病死したという記事ばかりで、学識や業績を記していませんから、誰が何を勉強したのかわからない」と^{よましん監}儀間真謹は述べている²⁶⁾。

c 商人などの民間人

この時代に琉球は中国との進貢貿易をもとに、日本や朝鮮、東南アジア諸国とも交易を行い大交易時代を築きあげていた。それは、明国は海禁策という鎖国政策を取ったため、中国商人が海外貿易を自由に行うことが困難となり、その分だけ琉球の立場が有利となったからである²⁷⁾。明王朝の正史である『明史』に記載されたアジア諸国の貿易回数を比較してみると、琉球国は171回と最も多く、次いで安南が89回である。朝鮮は30回、日本は19回で13位であるという²⁸⁾。

進貢貿易に携わった商人などの民間人が泉州や福州で武術を学ぶ機会はあったと思われる。しかし、これについても具体的な史実があらわれていない。

4. 諸仮説が推定の域を出ていない理由

以上の3つの伝来経路が推察されているが、しかし、伝えた人物や型などの具体的なことについては、前述したように明治時代以降は明らかになっているものの、それ以前においては解

明されていない。すなわち、どの経路についても現在のところ仮説の域を出ていないのである。

その理由はまず先にもあげたが史料が少ないということである。その他に以下に示す3つの理由があげられる。これらの理由によって研究を進めるのが困難になっているのである。

(1) 禁武政策によって武道関係の史料が少ない

琉球では長年にわたり禁武政策（刀狩り）が布かれたため武道が歴史の表舞台にあらわれることがなかった。したがって、武道に関する史料が少なく、このことが研究を進めることを困難にしている。その禁武政策は2度行われている。1度目は1490年のことで、地方に城を構えて割拠していた諸豪族の按司^{あじ}たちが首里城下に移住させられ、一切の武備を放棄させられている。この刀狩りが行われたために琉球では徒手空拳の武術が興隆したと考えられている²⁹⁾。2度目は、薩摩藩に1609年に武力征服されてからで、琉球では武器の携帯や武術の稽古が禁止された。しかし、武士たちは密かに唐手の稽古を続けていたと推察されている。なぜなら、明治時代に唐手が日本本土で公開されたとき、その伝授者は大名や士族であったからである²⁹⁾。

(2) 型の名称が意味不明のものが多い

技（型）の名称が漢字ではなくカタカナ表記なので意味不明のものが多く、中国との関係がつかめない。代表的な「クーシャンクー」という型はカタカナで表記されている。公相君という字を当てられることがあるが、それが正しいかどうか定かではない。拳聖君であるという説もある³⁰⁾。

(3) 型の名称が訛伝されている

技（型）の名称が訛伝の可能性がある。上述したことと関係するが、型名の口頭伝授においては、中国語音（北京音、福州音、泉州音）や琉球語音が入り混じって伝わっている可能性がある。このことが型の源流や伝来経路を探ることを困難にしている。

例えば、よく知られた型に「スーパーリンパイ（一百零八歩）」があるが、福州音ではソパーリンパイ、泉州ではチーパーリンペーと発音するという³¹⁾。

首里方言では母音の音素はa, i, uの3つである。短いeとoはほとんど使われず、e→i, o→uの対応になる。したがって、福州音のソパーリンパイは琉球ではスパールンパイと発音されることになろう。泉州音のチーパーリンペーと混じり、スーパーリンペーと伝わったということも十分考えられよう。

5. 今後の課題：技術比較と言語比較の必要性

これまで見てきたように、文献や口承を用いた研究ではもはや限界に達しているといえる。新しく史料が発掘されるようなことでもなければ、これ以上は解明が進むことはないであろう。そこで、別の方法でこの問題にアプローチすることを提案したい。それは、唐手と中国武術の運動技術そのものと型の名称に着目し、比較考察するという2つのアプローチである。

(1) 唐手の型と中国武術の套路を技術面から比較考察する

技の一連の動きを唐手では型といい、中国武術では套路と称するが、その2つを技術面から比較考察するというアプローチである。すなわち唐手の原型を中国武術に求めるという作業である。例えば、唐手の「セイサン（十三歩）」という型は福建省永春^{永春}県の白鶴拳にその源流を見ることができるという指摘もある³²⁾。このように型と套路が似ているものを比較考察する方法である。

(2) 唐手の型と中国武術の套路を名称の面から比較考察する

上の作業をする上で必要となってきたのが、唐手の型と中国武術の套路を名称の面から比較考察し、対応させるという作業である。中国武術の套路の名前が漢字で伝わっていないことが多いため、中国の方言が伝わったり、琉球に入ってから琉球の発音に訛って伝えられてきていることが考えられる。その例としては、前述した「スーパーリンペー（一百零八歩）」をあげることができよう。そこで言語学の知見をもとに比較考察し、対応させることによって、唐手の源流を探ろうとするアプローチである。

さて、これらの2つのアプローチで研究を進めるためには、まず唐手と中国武術の技術や歴史に精通していることが必要になる。明清時代には300種以上と言われる拳法が中国に存在したという³³⁾。それらのうちどれが琉球に伝来したのかを見極めなければならない。これは、中国武術と唐手によほど精通していないと比較考察することは難しい。そして、さらには、中国の各地の方言（特に福建省）に詳しいことが要求される。これらの両国での調査と資料の収集・分析の作業は、言語の問題もあって、一国の研究者だけでは容易ではない。日中の研究者による共同研究が期待される。

(付記) 本稿は、第4回東北アジア体育スポーツ史学会(2001年8月3～6日、中国成都市)で口頭発表した「東北アジアの武道・武術交流史に関する国際共同研究の提案」に加筆修正したものである。

注および文献

- 1) 本稿では、琉球王国時代、すなわち1187年から1879年までの沖縄を琉球と表記し、それ以降を沖縄と表記する。
- 2) 宮城篤正「空手の歴史」ひるぎ社、1987、p.249
- 3) 江里口栄一ほか「空手道」今村嘉雄(編)「日本武道大系」第8巻、同朋社出版、1982、p.92
- 4) 岩井虎伯「本部朝基と琉球カラテ」愛隆堂、2000、p.224
- 5) 高岡英夫「空手道の概要」浅見俊雄ほか(編)『現代体育・スポーツ大系』第20巻、講談社、1984、pp.110-117
- 6) 前掲書4)、pp.218-226
- 7) 沖縄県教育長文化課(編)「空手道・古武道基本調査報告書」榕樹社、1994、p.63
- 8) 摩文仁賢和・中曾根源和「攻防拳法空手道入門」榕樹社、1938年(復刻版、1996年)、pp.37-42
- 9) 富名腰義珍「空手道教範」大倉廣文堂、1935、pp.33-35
- 10) 前掲書3)、pp.137-148
- 11) 笠尾恭二「中国武術史大観」福昌堂、1994、p.536
- 12) 前掲書4)、pp.98
- 13) 岸野雄三ほか(編)「新修スポーツ大事典」大修館書店、1987、pp.298-303
- 14) 小島晋治ほか(訳)「中国歴史文化事典」新潮社、1998、pp.894-895
(孟慶達ほか(編)「新編中国文史詞典」中国青年出版社、1989)
- 15) 大西栄三「空手史」龍書房、1999、p.19
- 16) 高良倉吉「琉球王国」岩波書店、1993、pp.90-92
- 17) 前掲書4)、p.102
- 18) 金城昭夫「空手伝真録 伝来史と源流型」沖縄図書センター、1999、pp.79-80
- 19) 茅元儀(中国)が1612年に著した兵法書。
- 20) 宮本常一ほか(編)「大島筆記」「日本庶民生活史資料集成」第一巻、三一書房、1968、pp.345-392
- 21) 前掲書11)、p.451
- 22) 前掲書14)、p.603
- 23) 沖縄大百科事典刊行事務局(編)「沖縄大百科事典」中巻、沖縄タイムス社、1983、p.365
- 24) 同上書、pp.778-779
- 25) 前掲書15)、p.9
- 26) 儀間真謹・藤原稜三「対談 近代空手道の歴史を語る」ベースボールマガジン社、1986、p.18
- 27) 下中弘(編)「世界百科事典」29巻、平凡社、1988、p.627
- 28) 「沖縄を知る事典」編集委員会(編)「沖縄を知る事典」日外アソシエーツ、2000、p.6
- 29) 前掲書4)、pp.114-118
- 30) 前掲書16)、pp.260-267
- 31) 同上書、p.243
- 32) 同上書、pp.230-231
- 33) 前掲書15)、p.30

表 唐手史年表

1187	琉球王国（舜天王朝）成立
1368	中国・明王朝成立
1372	明国への入貢はじめる（琉球の中山王・察度）（1395年まで25回）
1392	留学生派遣（中山王・北京の国子監へ）
	ピン人三十六姓の帰化（那覇，久米村）
1404	冊封使来琉（1866年まで，24回）
1405	柔遠駅建設（泉州，1469年福州に移転）
1429	三山統一し尚氏王朝誕生（尚巴志）
1469	柔遠駅，福州に移転
1470	第二尚氏王朝誕生（尚円，1879年の廃藩置県まで）
1490	禁武政策（刀狩り：諸豪族の武備の禁止）
1609	薩摩藩が琉球を支配する
1613	禁武政策（薩摩藩による刀狩り：所持は認められるが携帯や稽古を禁止）
	琉球政府三司にあてた官命令指示書の覚え書き
1644	中国・清王朝誕生
1762	「大島筆記」著される
1866	最後の冊封使来琉
1867	冊封使の祝賀会で琉球武術の披露
1879	琉球処分（沖縄県を置く）
1917	富名腰義珍が京都武徳殿で空手を披露
1924	慶應義塾唐手研究会発足
1929	慶應義塾空手研究会と改称し，「唐手術を空手道として発足する」と宣言する